

城山三郎『冬の派閥』の方法

——北海道八雲を視座として——

吉 田 竜 也

キーワード：ユーラップ、青松葉事件、開拓

一

都築久義は『中日新聞』（1988・6・15～7・27）において「文学ぶらりぶらり 中部の人と作品」という連載をしている。一回につき一人、中部地方にゆかりのある作家を取り上げ、まさに簡にして要を得た記述でその生涯や作品を、当地の記述・写真を交えつつ紹介している。その掉尾を飾るのは城山三郎であり（三十一回）、「城山三郎に「冬の派閥」という歴史小説がある」という書き出しである。多くある城山作品において、都築が力点を置いたのが『冬の派閥』（新潮社、1982）。以下、本論における同作の引用は新潮文庫、1985による）であった。幕末、勤王派（金鉄組）と佐幕派（ふいご党）の対立が激化している尾張藩において、「朝命」によって佐幕派十四人が斬首される青松葉事件が起こる。そうした犠牲を払ったにもかかわらず、明治

新政府からは冷遇されたのが旧尾張藩であった。「朝命」「大儀」の「いかげんさ」。それに「翻弄」された徳川慶勝を描くが、それは戦時中「朝命」「大儀」に振り回された城山「自らの青春を問うことでもあった」と都築は述べている。都築は「彼の文学活動は今や多彩になっているが、その骨格を成し、核となっているのは命がけの青春の体験である」と述べてこの回を閉じている。日本経済史の武田晴人は、城山の作品を「同時代経済小説」「企業小説」「歴史小説」「政策の岐路を描く歴史小説」「伝記的な歴史小説」と五つに分けているが、そうした多彩かつ多産な城山の文業において『冬の派閥』は言及されることの比較的少ない作品であると言える。しかし都築は城山の文学におけるこの作品の重要性を指摘している。

名古屋市の文化のみち二葉館は城山の資料を多く蔵し、書斎を再現して展示しているが、その副館長であった西尾典祐によれば、城山が

幕末の尾張藩について興味を持ったのが、読書会を城山と長らく共にしている国司通が、長州征伐の際に斬首された国司信濃の子孫であったことによるという。周知のように青松葉事件の引き金になったのは、長州征伐総督だった慶勝をはじめとする尾張藩への遺恨によるという説もあるが、かくして城山は青松葉事件に関心を抱くようになる。青松葉事件の関係者と、慶勝の命による北海道の現・二海郡八雲町の開拓との関連を知るに至り、城山は一九七九年、北海道八雲町へ取材に訪れる。「八雲町では八雲郷土研究会（八雲町宮園^{マツ}四十二番地・主幹大島日出生）の人々と会い、話を聞いた。ついつい互いに熱中し、昼食も寿司をつまみながら話は続き、七時間ぶつ通しであった。さらに、資料のコピーも入手した」という²。

「周知の時代に新鮮な彩り」という新聞記事で、同時期に刊行された藤沢周平『密謀』、堺屋太一『峠の群像』と並び称される形で『冬の派閥』が取り上げられている。記事は武蔵野次郎のインタビューを引いて、三作ともよく知られた時代を取り上げていながら、例えば『冬の派閥』では「小説舞台で脚光を浴びることが、まずなかった徳川慶勝に視線を定める」こと、「藩士の北海道移住にも筆が及ぶ」こと、そこに新味があったとしている³。その他の同時代評を見ると、「誠実な名君であった、尾張慶勝にもう少しの指導力、あるいは政治性があれば、朝命を待たずして、派閥争いも収拾できたのではないか」、「リーダーシップを問う歴史小説」というように、慶勝という人物が主に注目されている⁴。一方、小説本文において三割ほど筆が費やされている北海道移住という題材、旧藩士たちの苦闘については、「金鉄組の北海道での生

活は、実に印象的に描かれて」おり、「後半で舞台が北海道に移ってから、ぐっと盛り上がる」反面、前半は「作者が慶勝に成り代わって、手記を書いているような印象」だったのに、「話が北海道に移ると、慶勝がいなくなつて」しまうので、「作者はもつと慶勝のなかに入つて書くべきではなかったのか」と評されている⁵。結局のところ慶勝という人物のありよう、そこから派生する「組織と人間」「リーダーシップ」という問題を中心として読まれている⁶。

確かに例えば作品の前半、田宮如雲が事件の進展においてキーパーソンとして浮上してくるに従い、慶勝とは距離を取り、沈黙を貫き、慶勝にとって不気味な他者と化していき、疑念に苛まれる様相など、本作は慶勝という人物の心根に迫っているかのような趣がある。一方、同時に、未だ明確な結論を見出せない青松葉事件の発端について、その史実においても埋まらない謎を、うまく作品中の空白として取り込んでいるありよう、虚実の線引きの妙ということもそこに認められる。先に引いた武田晴人は、日本経済史研究の視点によって城山作品を通覧した結果、「城山作品を通して明らかにしたように、作家はそのテーマ、つまり作品を通して伝えたいことをより強く印象づけるためにさまざまなレベルでフィクションが持ちうる自由度を利用している」と述べている⁷。本稿では旧尾張藩士たちの北海道移住と開拓という歴史的事実を、どのように城山は小説化しているのか、という点について着目する。そのことで城山の小説作法の一端が、つまり史実とフィクションの差配のありようの一端が明らかになると思われる。

本作は青松葉事件の事と次第を描くが、その中で処刑の前に服毒した成瀬嘉兵衛を診察してもらうため、典医の能見喜介が呼び出される場面がある。呼びに遣わされたのは、藩内の勤王派の拠点の一つである明倫堂の若い書生、片桐助作と門部孝造であった。二人と能見は、事件の後、共に北海道移住者となる。成瀬嘉兵衛の服毒については、城山が参考文献で挙げている西尾豊作『子爵田中不二磨伝』にもその記載がある⁸。なお典医の能見は架空の人物で、能見という名の移住者は存在せず、典医であったという人物が北海道移住者に加わっていたとする資料も見当たらない。片桐は実在の人物であり、実名で小説に登場している。一方、門部という人物もまた架空の人物であり、後に述べるが、実在の人物の幾人かのエピソードがこの門部に集約する形になっている。

小説では慶勝の命を受け北海道移住の調査隊として吉田知行、角田弘業とともに片桐もまた、後に慶勝によって八雲と名付けられるユーラップに赴いているが、これは史実に基づいている。尾張藩からの北海道八雲町への移住者で結成された和合会という団体がある。『冬の派閥』「あとがき」には取材協力者として、会の会員、つまり尾張藩より八雲へ移住した士族の子孫たちの名が挙げられている。城山と子孫たちの間でどのようなやりとりがなされたのかは詳らかではないが、『冬の派閥』刊行後に和合会は『和合会史』を刊行して、移住に至るいきさつやその後の経過を会員自らまとめている。『和合会史』に書かれ

ている事柄や資料は、執筆前の城山にも伝わっているものと考えられる。同書の記載、そして城山が参考文献に挙げている『八雲町史』¹⁰などの記載に、小説の展開は則っている。

片桐は明倫堂の書生であったが、青松葉事件において明倫堂関係者が関与していることは旧来言われてきた（そのことは今日の研究では、一次資料を基にして明らかにされている¹¹）。八雲に先遣調査隊として、そして後に開拓委員として赴いた片桐。さらに佐幕派による策略を京都に在る慶勝に知らせ、事件の発端を担い、処刑の場にも立ち会った吉田知行¹²。明倫堂主事を務めた角田弘業、その弟で明倫堂助教見習であった角田弟彦¹³。青松葉事件に大なり小なり関与した人物が北海道に移住した、と言われていることに基づいて城山は、移住以降も未だ事件の影から逃れられない移住者たちという、本作後半部のプロットを創案したのであろう。

旧士族の北海道移住について、士族授産のため、そして鹿児島士族に呼応しようとする藩内の勤王派、つまり金鉄組の不穏分子を抑制するためといったことが、今日の研究ではその要因として挙げられている¹⁴。注目したいことは、城山は本作で「金鉄組を北海道に移すというのは、遺族たちの怒りをやわらげるひとつの方法ではある」ということを、慶勝の主要な動機として述べていることである。

青松葉事件以降、介錯人たちが次々に「変死」していく様を小説は描き、「青松葉のたたりだ。いよいよ、たたりがはじまった」と人々は噂している。処刑された渡辺新左衛門の子息・鋭三の手記を、水谷盛光はその著作に引いている。「あとがき」にあるが、水谷は城山の取材

協力者であり、青松葉事件について先駆的に考察を進めた、名古屋の郷土史家である。「父新左衛門の討手、新野久太夫は、発狂して、わが一子を殺して自殺した。父の討手に予定されていた渡辺鉦次郎は、榊原勘解由を討ったが、のち、知多郡長るとき、夏期水練中に事故死した」¹⁵。城山はこれを参考にして「たたり」という展開を描いたのだろう。そして慶勝も高熱にうなされ、市中の人々も「討ち手だったひとは、みんな、畳の上では死ねまい」と「うわさし合うようになった」。事件後の名古屋を城山は、処刑者とその遺族の怨念が渦巻く街として描いている。「気の毒に。好き好んで討ち手になったわけでもあるまいのに」と人々は変死した介錯人に同情するが、「処刑者の遺族たちの幽閉は、三年で解かれたものの、その間、幾人もの病死者を出したこともあって、怨念は一向に消えなかった」。そして「金鉄組など処刑者側をのろう声も、出てくる」。金鉄組の藩士たちの北海道移住を後押ししたのは、こうした市中の空気だった。ゆえに介錯人や介補を勤めた者たちの移住後の苦闘と死は、贖罪という様相を帯びる。介錯人にとっても命令に従ったに過ぎないというのに、恨みを買われ苦闘を強いられることの理不尽さ。城山は本作の後半部分をそのように構想したのではないか。

三

徳川慶勝の後を継いだ義礼がヨーロッパの視察に八雲にいた片桐助作を同行させるということに小説ではなっているが、史実では、ヨーロッパ視察に同行したのは、やはり八雲開拓の委員の一人で、後に尾

張徳川家の家令となる海部昂蔵である。¹⁶海部の名は本作に登場せず、海部が果たした役割は複数の登場人物に分散されている。「あとがき」で片桐の子孫は取材協力者の一人として挙げられているが、海部の子孫の名はないようである。小説の片桐は喘息持ちで「健康に自信が持てない」ので渡欧を辞退するが、義礼から「たとえ毎日寝ていてもいいから、とにかく彼地へ行ってみることを」と重ねて慫慂される。旧尾張藩士の移住者二世である都築省三が著し、八雲開拓史の基礎的文献となっている『村の創業』によれば、片桐は「蒲柳の人」とされている。¹⁷片桐助作の子息・寿の遺稿には、渡欧する海部と交代で再び八雲に赴くことを尾張徳川家から慫慂され「毎日寝て居てもよいから行け」と言われたとある。¹⁸城山がこのエピソードを片桐渡欧の場面として転用したことは明らかだ。ところで『村の創業』は城山の参考文献リストにはないが、『八雲町史』の参考資料の一つである。八雲郷土研究会のメンバーと城山が長時間に渡って会談したことは先に触れたが、会談、取材の際に、同書が触れられなかったということは、まず考えられない。ついでに述べると、小説で角田弟彦が、「萩の花を賞でようとしたところ、見下すのではなく、見上げる高さだったのにあきれ」、弟彦も「さすがのおれも歌にはできない」と、北海道の萩の木のあまりの大きさに苦笑する場面があるが、『村の創業』にも「花の見えぬ萩の花見」という章題でまったく同じエピソードが書かれている。¹⁹

片桐寿の元を、水谷盛光は再三訪れたが、その際に青松葉事件における片桐助作の役割について「本事件には其場にあつて、刀をしめすに用ふる水桶を運ぶなどの雑務に任じたとは、後年語る所であつた」

と記した草稿を見せてもらったという。²⁰ 片桐助作も事件において補助的な役割を担わされたということは、水谷盛光や和合会会員を通して城山も知ることとなったであろう。そして片桐寿は「八雲移住者にも本事件に関与する者数氏があった」と明言している。²¹

『名古屋市史』²²などの記載から、介錯人を務めたことが確認できる八雲移住者は、吉田知行の弟・小寺穀のみである。小説に小寺と逐一対応する登場人物はいないが、複数の登場人物の造形に反映されている。水谷盛光は、小寺の子息にインタビューした『名古屋タイムズ』の記事を紹介している。²³ 記事によれば、青松葉事件のことを子息は父より度々聞かされており、「討手は、いずれも非業の死をとげた。わたしは、その最後の人となった。周囲の人も、お前は、討手の最後の人だ。丈夫だから畳の上で死ぬだろう」といつてくれる。どうか、わしだけは例外であつてほしい」と「口ぐせのようにいつていた」。この記事によれば小寺は、八雲を流れる遊樂部川で架橋工事を見物中に脳溢血で「不慮の死をとげた」。そして人々は「いまさらながら、青松葉事件」の祟り（怨霊）を恐しく思ったという。

水谷盛光は前掲書で、小寺の子息は「極めて元気で」「盛大に酪農を経営している」と、取材した記者の言葉を付言することで「祟り」への疑念を示唆している。『和合会史』を繙いてみると、「最後の人」である小寺は一九三三年、八雲開拓の始まりより半世紀を経て、八十六歳で死去したとあり、一般的に言えば長命の部類に入る。水谷は小寺について、八雲町の郷土史家・大島日出生に調査を依頼し、大島は息女にも父について問い合わせをしている。息女は答えて「父の死因に

ついては疑問がある。水泳に堪能なものは、川に落ちてでも溺死するこ
とはない。単なる水死とは考えられない。亡霊のたたりでなからうか」
と述べている。子息と息女の間で死因についての見解が異なっている
が、「最後の人」の遊樂部川での死は、小説の末尾、移住者の中で青松
葉事件に直接触れ得た最後の人である、能見喜介のサランベ川（遊樂
部川支流）での死を端的に想起させる。

不整脈に悩まされつつも遡上する魚を見るために河原を歩いていた
能見は足を滑らせ、落水する。「これで古い人は、みんな居なくなった」
と若者が自分の死を話す光景や、自分の亡骸を時の尾張徳川家当主・
義親が抱き起す光景を冷たい水の中で思いながら、彼の「意識は、急
速にうすれて」いく。「川沿いの小道を通るのは、熊狩りの一行ぐらい
である」と小説にあるように、熊狩りにしばしば八雲を訪れ、終生八
雲を気にし続けた義親ならば、²⁴ 確かに能見を発見するかもしれない。
能見の見たものは幻影に終わるとは言い切れない。城山は主君に仕え
た者に、このような最期を用意した。なお『和合会史』によれば、小
寺穀が死去した一九三三年八月、徳川義親は恒例の八雲滞在をしてい
る。一九六七年七月、小寺の子息の葬儀に、二十一代当主・義宣夫妻
も参列している。

能見は人々が「たたり」を言うことを常々否定してきた。「たたりな
んで、あるものか。はじめての土地へ来て、はじめての仕事をするんだ。
事故が起るのは、当たり前だ」と。問題は、すべての因果を「たたり」
に求めてしまうこと、過去との紐帯を切れずにはいられない人間のあ
りようということではないか。『村の創業』によれば、小寺は、青年に

「漢籍の講義」をしつつ、先駆的に大農計画を打ち出し、牧牛を試み、「舶来の農具」を導入した一人であるが、彼らの代では確かにそれは「失敗した」。しかし彼の子息の代で「今やその充実した実地の経験に基いて、大農の計画のやゝ見るべき成果を上げてをるのは、父の理想を今漸く実現したものと云ひ得やう」とある。八雲に「たたり」はないのである。いずれにせよこうしたエピソードをふくらませ、肉付けしたのが『冬の派閥』後半部の展開である。「ただ」の死を「たたり」による死と見なしてしまう過去を引きずる人々、というテーマへとつながっていったのである。

四

このように史実と多少のズレをはらみながら小説は展開されるが、特に八雲開拓の過程において、青松葉事件で介錯人や介補を勤め、その「たたり」で死んだとされる登場人物たちについては以下のような特色がある。八雲移住以降、作中でそうした死者は四名いるが、いずれも移住者名簿にその名が存在せず、そして城山の参考文献にある『名古屋市史』や、西尾豊作、水谷盛光らの著作にもその名が存在しない、架空の人物となっている。

事件関係者の、移住後最初の死者は「明倫堂書生として、青松葉のとき、介補をつとめた一人」の三島であり、荷物の陸揚げの際、小舟が転覆して溺死した。こうした事故については『和合会史』はじめ、八雲開拓関係の資料には見当たらなかった。小説では「青松葉のた

りじゃ。介補にまでたたりがあるんだから、介錯した人は、ますます、まともに死ねんぞ」と、やはり人々は「うわさ」をする。

次の死者は、林紋三郎の介錯人であった宮原小兵衛。『名古屋市史』などを見ると、林の介錯人は永田良一郎とある（西尾豊作の著作には、林の介錯人は別人が記されており、『市史』などの記述とズレがある）。永田良一郎については不詳だが、少なくとも北海道への移住者にその名はない。小説の宮原小兵衛は「一目置かれる存在」であり、片栗粉工場が作られた際、彼はその組合の代表になる。しかし工場は「負債が雪だるま式にふえ続け」、宮原は「片栗粉工場についての責任は、すべて自分に在り、死を以て償う」という趣旨の遺書を残して割腹自殺をとげる。こうした事件もまた、八雲開拓関係の資料には見当たらないが、移住者の一人、辻村勘治が片栗粉工場を一八八二年設立、事業に乗り出すも失敗に終わったということは、『八雲町史』はじめ各資料にある。『村の創業』によれば「辻村寛治氏は後に気が狂つて、或夜その朽ち傾いた古い水車小屋の梁に禰を掛けて縊死を遂げた」とある。宮原小兵衛の造形には、こうした事件が反映されている。

次に、牛の角に突かれて瀕死の状態となり、甥に介錯を命じて死んだ門部孝造である。青松葉事件の際、介補を務めている。門部は郷里で国学や剣術を教える塾・和合塾の教師を務めていたが、その塾の生徒を八雲に呼び開拓に従事させる。このエピソードは『八雲町史』『和合会史』などにもあるように史実に基づいている。海部昂蔵は維新後、帰農して和合塾（和合書院）を主催しており、移住者の佐治為泰が名古屋まで行って塾生の少年たちを八雲に呼び寄せ、幼年舎を設立して

いる。また移住者の一人で和合塾生であった横井田鶴松は、一九〇四年牧場で作業中、牛に突かれて死亡している。そして青年の教育に熱心で、かつ西欧の農法や器具を導入し、牧牛を営んだ門部は小寺穀を彷彿させる。

最後まで生き残った元介錯人は藤沢倉之助であった。成瀬嘉兵衛の介錯人とされているが、『名古屋市史』などを見ると、成瀬の介錯人は丹羽（本杉）精五郎となっている。丹羽については西尾豊作や水谷の著作で詳しく紹介されており、処刑された十四士の法要を主催し続け、一九三七年に九十三歳で死去している。そして丹羽について興味深いことは、『和合会史』によれば、移住はしなかったものの、しばしば八雲を訪れたという。八雲町大新墓地の吉田知行の墓碑には「海部昂蔵撰」「丹羽精五郎書」と刻まれている。藤沢は一九一四年、鋸の入った倒木の下敷きになり死んだ。「人々は声をかけ合って逃げたのだが」藤沢は「突っ立ったままであった」。「逃げおくれたというより、わざと逃げなかったのだ、というひとつもあった」。類似した事故が実際にあった。移住者の岡野頼隆と海部市蔵が一八八三年、伐木の際に、ともに亡くなっている。『冬の派閥』『あとがき』には、取材協力者として岡野の親族の名が挙げられている。『改訂和合会史』によれば「大枝が飛んできて兩人に当たり、重傷を負った」が、かつて松前藩の関所であった山越の病院や、函館での治療が間に合わず、結果「息を引き取った」。この事故が公立病院設立願いの「動機のひとつ」となったという。²⁵

このように作中の元介錯人・介補について直接のモデルはなく、幾人かの（多くは青松葉事件とは関係のない人々の）エピソードがちり

ばめられた形で造形されている。上記のごとき死が、「たたり」であるとなんに「うわさ」される。当然それは「うわさ」でしかない。藤沢の死は、そのような「うわさ」を内面化してしまった挙げ句の死であったのかもしれない。あるいは、藤沢の死をそのように受け取るのは、あくまで周りの人々の主観でしかないということでもある。ともあれ、必ずしも城山は「たたり」による死、とは描いていない。それにしても「たたり」とは何なのか。作中、門部孝造の死後に、「いよいよ最後のたたりは、藤沢さんに来るわ。首斬役で残っているのは、もうあの人だけなんだもの」と、能見喜介の妻・シゲが話すのを聞き、能見は反論するが、村中皆そう噂していると言いつ返される。「すでに明治も二十年を越し、何でもない開拓農家の中で、しかも金鉄組に属していなかった者まで、こういう言い争いをする。それこそたたりではないのか」。そう思う能見は「にがい思いで口をきく元氣もない」。生存のための切迫した状況によって強いられた死が、「たたり」という表象に糊塗されてしまう様相をこそ、城山は描いているのである。

水谷盛光も述べているように、「この北海道開拓移住については『名古屋市史』も伝えていないほどで、郷土では余り知られていない。まして「八雲町」の存在も知られていない」。²⁶ 青松葉事件の「たたり」という主題を括弧にくれば、現実の死者も、作中の死者も、開拓や事業という苦闘の過程において、不慮の死をとげた人々であるという点で変わりはない。そうした埋もれつつある人々を城山は掘り取った。

青松葉事件で処刑された十四士は、小説にもあるように一八八五年、大須の大光院で大がかりな追悼法要が催された。一方で介錯人や介補

の大半のその後は、詳らかにはなっていない。だからこそその大胆な創作、ということであるし、そしてこうした創作という形によって城山は、歴史に埋もれた事件のもう一方の〈被害者〉が、生き(残)ることにつきまとう困難に向き合い、やがて死をとげるまでを描くことで、彼らを吊っているのである。

注

¹ 武田晴人「経済史研究から見た城山三郎作品」(『歴史評論』705号、2009・1)

² 西尾典祐『城山三郎伝——昭和を生きた気骨の作家』(ミネルヴァ書房、2011) ちなみに、大島日出生らは『ゆうらふ』という郷土史研究の雑誌を刊行しており、そこに大島が城山から取材を受けたことについての言及があるが、現時点では未見。同誌は八雲町立図書館に所蔵されており、他日を期したい。城山の取材協力者の一人である、八雲町の太田正治(酪農家・農業指導者)の自伝『無終の理想 前にあり』(デーリイマン社、1993)には、城山から取材を受けたことについての記載はなかった。ただ小説における、八雲町の土壌や氣候についての記述、ジャガイモの生産や牧畜へといった、移住藩士における農業の進展についての記述には、専門家である太田の助言が反映されているものと考えられる。

³ 「周知の時代に新鮮な彩り 評判の歴史小説『密謀』『峠の群像』『冬

の派閥』(『朝日新聞』朝刊、1982・3・7)

⁴ 「書評『冬の派閥』城山三郎著」(『経営コンサルタント』1982・4)

⁵ 「話題の本を追って『冬の派閥』」(『総合教育技術』1982・11)

⁶ 他に「ビジネススマンがなぜか今読む『武将もの』『密謀』『歴史と名将』『徳川家康』『冬の派閥』『峠の群像』」(『サンデー毎日』1982・5・2)を参照したが、同記事では八雲についての言及すらなかった。なお同記事によると『冬の派閥』はその時点で十三万五千部を発行しているという。

⁷ 武田晴人(注1)

⁸ 西尾豊作『子爵田中不二磨伝(尾張勤王史)』(川瀬書店、1934) 本稿における同書の引用は大空社の復刻版による。

⁹ 和合会『和合会史——尾張徳川家移住人の歴史』(和合会、1984)

¹⁰ 『八雲町史』(八雲町、1957)

¹¹ 藤田英昭「慶応四年前後における尾張徳川家の内情と政治動向」(『徳川林政史研究所 研究紀要』第52号、2018・3)

¹² 水谷盛光『名古屋城青松葉騷動』(泰文堂、1972)

¹³ 西尾豊作(注8)、藤田英昭(注11)

¹⁴ 藤田英昭「北海道開拓の発端と始動——尾張徳川家の場合」(『徳川林政史研究所 研究紀要』第44号、2010・3)

¹⁵ 水谷盛光(注12)

¹⁶ 『和合会史』(注9)、片桐寿・安藤慶六「片桐助作とその時代——

「郷土文化」49巻1号、1994・8）

17 都築省三『村の創業』（実業之日本社、1917）

18 片桐寿（注16）同文は片桐寿の遺稿をまとめたもの。寿は生前、八雲に残る助作の子孫に自筆の謄写版を託したとのことで、和合会会員は城山の取材時にはその内容を知りえている。

19 和歌的なものが通用しない北海道という問題については、別途考察したい。また先住民であるアイヌをめぐる問題についても本稿では触れることすらできなかった。なお、八雲町で調査を行った文化人類学の原誠によれば、土族のたしなみは八雲移住後も続けられたが、しかし今日の八雲では食文化にせよ方言にせよ「徳川家への敬意が残る一方で、故郷の風習は現在ほとんど残っていない」という（北海道山越郡八雲町の土族移民について）『名古屋大学人文科学研究』34、2005・2）。

20 水谷盛光「元陸軍大佐・片桐寿氏との出会い」（名古屋郷土文化会『郷土文化』48巻3号、1994・3）水谷が紹介しているこの片桐寿の言葉は、注16に見られる。

21 片桐寿（注16）

22 『名古屋市史 政治編第二』（名古屋市役所、1915）本稿における同書の引用は愛知県郷土資料刊行会の復刻版による。

23 水谷盛光『尾張徳川家明治維新内紛秘史考説』（私家版、1971）

24 徳川義親『最後の殿様』（講談社、1973）

25 和合会『和合会百周年記念 改訂和合会史』（和合会、2015）

26 水谷盛光（注12）

付記

北海道八雲町の出身である私は、城山三郎『冬の旅』の名は知っていました。本作について考えをめぐらすようになったのは、都築久義先生のご定年で、私が都築先生に代わって「国文学特殊講義 郷土文学」を臨時で担当することになったからです。大役を仰せつかり授業準備に右往左往していましたが、都築先生は先生のご著書をはじめ、郷土文学に関する書物を幾冊も私に恵贈下さり、そして励まして下さいました。ご学恩に感謝申し上げます。とともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。